

概念が形成されるとき —— 「規約」・決断・アスペクト¹

入江 俊夫 (Toshio Irie)

東邦大学・東京医療保健大学・千葉大学 (非常勤)

ウィトゲンシュタインの数学の哲学の基調は数学的プラトニズム批判にある、とはしばしば言われることである。彼は、数学では、何らかの対象について実際に成り立っていることが記述されるのではなく、記述の枠組みが与えられる、ないしは、概念が形成されることを強調する。さらにウィトゲンシュタインは、概念が形成される際にある種の「決断」が為されると指摘しているが、その内実はどのようなものであったのかについてはいまだに明確な理解が得られていない。果たして、ウィトゲンシュタインの立場をある種の規約主義と捉えてよいのだろうか。

こうした問題を扱うため、本提題では、1939年に行われた数学の哲学の講義録の编者でもあるC.ダイヤモンドが、早い時期(1968年)に、ダメットによる規約主義的解釈(根元的規約主義的解釈)に対する批判として、「アスペクト論」を援用しつつ提出した応答(“The face of Necessity”²。以下、FNと略)を検討する。ダイヤモンドは、ウィトゲンシュタインの哲学の最も定評のある解釈者の一人であるが、ダメットにおける「いかにして首尾一貫した反実在論を展開するか」という問題意識の共有が希薄であるため、ダメット論文に対する批判としての有効性については慎重に考えられなければならない。そのため、今回の提題では、ウィトゲンシュタイン解釈に対する寄与という側面にトピックを限定することにする。(FNの内容自体には、反実在論の展開のために示唆的なものも見受けられるため、皮肉なことではあるが。)

本提題は、ウィトゲンシュタインにおける「概念規定」とその際の「決断」というトピックをめぐって、次の二つの論点を扱う。

1) ウィトゲンシュタインは、「中期」ないしは「移行期」における早い時期から、彼の数学の哲学において「アスペクト」について再三言及していた。彼の数学の哲学と「アスペクト」との連関についてFNは何を明らかにしているのかを見定める。FNでダイヤモンドは、根元的規約主義的な概念規定を、新たな規準を取り決めることにより、単に古い「ゲーム」から別の「ゲーム」へと切り換えることと捉え、それに対抗する見方を『哲学探究』のいわゆる「アスペクト論」を援用しつつ提出する(彼女はここで、一種のウィトゲンシュタイン解釈を提出していると私は考えている)。その際ダイヤモンドは、規則とは異なる次元の要素として“sense”という概念を導入し、アスペクト論との連関づけを行っている。また、推論に伴う「強制」についても、規則は任意に決められるとしても、そのことの持つsenseは任意ではない、と述べてつア

¹ 本研究は、公益財団法人風樹会の助成を受けた研究成果の一部である。

² Diamond, Cora. 1991. “The face of Necessity”. In her *The Realistic Spirit*, MIT Press, pp. 243–266.

スペクト論との連関付けを行う。この sense 概念は、近年、谷田 (2021)³で、やはりアスペクト論との関連において本格的に追究された“point”という概念に近い。本提題では、谷田論文を援用しつつ、ダイヤモンドによるアスペクト論との連関付けから、規約主義的解釈において「取り決め」として顕れる「決断」が、ウィトゲンシュタインにおいてはどのような内実を持っていたのかを考察する。

2) こうしたアスペクト概念との連関づけと FN におけるダイヤモンドの考察を、『数学の基礎』(以下、『基礎』) 第3版で増補された第VI部における所見群と照合することにより、我々は、初期の『論理哲学論考』(以下、『論考』)における基本的見解の進展をこの第VI部において明確なかたちで捉えられるようになる。『論考』でウィトゲンシュタインは、論理学や数学の必然性の源泉を「操作」に見ており、その一つの表現が「論理学においては過程と結果が同等である」(『論考』6.1261)という見解であった⁴。これは、論理学においては過程と結果が内的に関係することを含意する。『基礎』第VI部では、過程と結果とが「外的に関係する」状況と「内的に関係する」状況との比較が繰り返し考察されており、これはしばしば言われるような「実験と証明」との根本的な違いの論点として理解することもできるが、本提題におけるアスペクト概念との連関づけと FN におけるダイヤモンドの考察との照合により、この論点にとどまらず、過程と結果とが外的に関係する状況から内的に関係する状況への移行(概念規定)という論点をも扱っていると理解できるのではないかと思われる。そして、この際にも、ある種の決断が関与しているのである。

以上を通じて、「概念規定」という事態とウィトゲンシュタインが「自ずからなる決定」(“spontane Entscheidung”)と呼んでいた事柄の内実を幾分か明らかにしたい。

³ 谷田雄毅. 2021. 「ポイント (Witz) とアスペクト (Aspect)」。『現代思想 総特集=ウィトゲンシュタイン』, 199-210. 青土社.

⁴ 『論考』のための草稿では、「論理学(数学)においては過程と結果は同等である」と記されている。(Notebooks 1914-1916, The University of Chicago Press, p.42)